

2022年年賀式・始業式（2022年1月8日）

明けましておめでとうございます。

2022年、新しい年になりました。「一年の計は元旦にあり」といいますが、新年というのは今年一年の目標を改めて考える良いチャンスだと思います。皆さんは、それぞれ、今年目標をどのように考えていますか。

さて、今日は新しい年を迎えるに際し、大きく二つの話をします。まずは、依然我々が直面している、新型コロナウイルスへの学校としての対応について、次に、新しい年に際し、武蔵生に考えてもらいたい私の希望についてお話をしたいと思います。

まず、新型コロナウイルスの状況です。

国内の新型コロナウイルスの感染状況は、この2、3か月収まっていましたが、報道にあるとおり、新たにオミクロン株が発生しました。このオミクロン株は、沖縄や山口、広島の例を見てもわかるように、その感染力は極めて強く、感染者数は急上昇していきます。ここ東京でも、感染者数は間違いなく急上昇していくでしょう。

最近のデータによると、現在の罹患者はワクチンを二回接種しても感染していること、また20代、30代を中心に増えていることが示されています。一方、このオミクロン株は重症化しないのではないかということも言われていますが、そのことが「気の緩み」にもつながりかねないという指摘もあります。

やるべき対策は、これまで通りです。まず、しっかりとした健康管理。不安がある場合は無理をしない。次に、飛沫防止対策。マスクを外しての会話をしない。まめな手洗い・手指消毒、そして寒くなりますがこまめな換気対策。

おかげで、武蔵は、これまでもクラスターが発生することもなく、コロナ対策はしっかりできたと思っています。それは皆さん一人一人の自覚のおかげだと思っています。ただ、この2、3か月、少し緩んできたことも事実だと思います。これから急激に増えるであろうオミクロン株という新しいタイプのコロナに対して、改めて気を引き締めて、対応していきたいと思いますので、皆さんのご協力よろしくお願いします。

特に高校3年生の諸君は、いよいよ受験を迎えます。体調管理にはこれまでも気を遣っていると思いますが、改めて留意をし、万全の状況で当日を迎えられるよう、願って

います。頑張ってください。

次に、新しい年に際し、武蔵生に考えてもらいたい私の希望についてお話をしたいと思います。

私は皆さんに期待していることは、繰り返し言っていますが、一つは「公共心」を持つこと。もう一つは「人権感覚」を磨くことです。10年前の武蔵生も、30年前の武蔵生も、50年前の武蔵生も、これらの点は持っていたと思いますが、私は、この「公共心」と「人権感覚」は、未来を飛ばたく武蔵生には是非とも身に付けておいてほしいと願っています。

「公共心」。つまり自分のためだけでなく、人のため社会のためという意識を持つ。人のためにやったことが自分の喜びになり、自分のためにやったことが人の喜びになる。

もう一つは、「人権感覚」。人権感覚とは、人権が守られているか侵害されているかを感知する力なんだと思います。人としての尊厳が大切にされているか、踏みにじられているかを感知する力といえると思います。

今日は、その「人権感覚」の話をします。

なぜ、これが重要かという、今の世の中、一見高い学歴や社会的地位にある人でも、こんなこと言っちゃうの、あんなこと言っちゃうのということが多すぎると思います。そのルーツを見ていくと、私は少年時代青年時代にあると思っています。そのときに、しっかりと人権感覚を磨いているかどうか。これをやったらおしまいだよ、これを言っちゃあおしまいだよという感覚を磨いているかだと思います。

だからこそ、武蔵生には考えてほしい。

日々の暮らしの中で、人を傷つける言葉を何気なく言っていないか。特に今はSNSの問題は深刻です。匿名であることをいいことに、人間を深く傷つけていることに思いを致してほしい。言葉は魔法です。逆に、何気ない一言で、人を元気にもすることもできる。言葉の力は大きいと私は思います。

そういう私も、いまだに失敗続きです。しくじってばかりいます。何気ない言葉が人を傷つけてしまうこともある。だからこそ、この人権感覚を磨き続けていきたいと思っています。

この人権を深く考えるにあたって、2学期末に中3で行われた人権研修から多くのことを学びましたので、全校生徒にも紹介したいと思います。

この日の講師は、武蔵の62期末の卒業生である湯浅誠さん。

湯浅さんは62期卒なので、現在52歳です。社会活動家として活躍されており、現在は東京大学の特任教授の職にあるとともに、NPO法人全国こども食堂支援センター・「むすびえ」の理事長をされています。先日もNHKの夜のニュースで、コロナ禍における生活困窮の問題について、この「むすびえ」の話が取り上げられ、湯浅さんがお話をされていました。

湯浅さんは、20代のころからホームレス支援に従事し、2008年、ちょうど40歳にさしかかるぐらいでしょうか、この頃、リーマンショックなどの影響により「派遣切り」が話題になりましたが、派遣切りにあった人たちに居場所を提供する「年越し派遣村」の村長となり、話題になりました。さらに翌2009年からは、行政の仕事に転じ、内閣府の参与としても活躍し、現在は先ほども言ったように、全国の子ども食堂を支援しています。格差と貧困の問題の解決に向けて、ずっと現場で向き合い続けている方です。

私が考える彼の素晴らしさは、体制や反体制ということではなく、派遣村など苦しい状況の人々の立場に立ちながら、政府や大学の視点からも活動をされ、積極的に社会に発信をされ、道なき道を開拓されています。私は、独創的で柔軟な、まさに武蔵生らしいなと思っています。

さて、この湯浅さん。生徒から「人権とは何か」という質問が出て、その質問に対する答えが、私は素晴らしいと思いました。なんて言ったと思いますか。

湯浅さんは、「人権というのは教科書的には『人が生まれながらに持っている権利』ということなんだろうけれど、平たく言えば『見ててくれる人がいる』『気にかけてくれる人がいる』という状態かな」と。

「見ててくれる人がいる」、「気にかけてくれる人がいる」というのが人権ということなんです。なるほどと思いました。

もう一つ、湯浅さんの言葉で印象的だったのは、「自分の当たり前が通用すると思っ

当たり前が絶対だと思いがちです。そうではない見方があるという多様性も、人権の問題を考える上ではとても大切なことだと思います。

中3の人権研修会では、生徒と湯浅さんとの間で、格差の問題や人権の問題、あるいは湯浅さん自身のこれまでの人生について、やり取りが続きました。最後にとても印象深かったことがありました。

生徒が「社会を生きやすい社会にするために、政策への影響力もない僕たちが今すべきことは何か」と質問したところ、湯浅さんはしばらく考えられたあと、「歩くのがゆっくりな人と一緒に、少しゆっくりと歩くこと」と答えられました。

歩くのがゆっくりな人は、実は身の周りに見えることなんですね。でも、注意していないと見えない。湯浅さんはこう言いました。「周りの人に好意的な好奇心を向けること。その先に世の中がある」。私はこの答えの中に、「若い皆さんにも影響力はあるよ。大いに社会を変えていく力があるよ」という、湯浅さんの力強いメッセージを感じました。

「人権」とは何か。そして、何故「人権」が大事なのか。ぜひ武蔵生一人一人に考えてほしいと思います。なお、湯浅さんが最近書かれた著書で「つながり続けることも食堂」という本がありますので、図書館に入れておきます。湯浅さんからはサインもいただきました。

「子ども食堂」はこのコロナ禍で、大きく拡大しているということですが、これは単に食事を提供する場というものではなく、子どもはもちろんですが、大人も含めた人々のつながりを提供する場だということがよくわかります。人は誰も「つながりたい」と思っているんですね。「つながる」がキーワードです。興味のある生徒はぜひ読んでみてください。

最後に、武蔵に新たにできた施設や今後の工事について連絡をします。

まず、武蔵大学に新しく来年度から国際教養学部が新設される関係で、東門横に11号館が立てられ、このたび竣工しました。それに伴い生協も、この11号館に越してくることになりました。生協が近くになります。3学期中に新店舗が仮オープンされるのですが、まだ準備ができていないので、高中生の利用については当面控えてほしいとのことです。

利用開始の時期については、生協側とも連携を取りながら、その利用方法についての目

途がつき次第、改めて告知をします。それまでは当面の間、従来通り、定期購読雑誌のみ許可し、それ以外の購買は禁止としますので、よろしくをお願いします。

次に、サッカーグラウンドについて、人工芝を張り替える工事を行います。この2月から3月に行う予定ですので、その間、体育の授業や部活動などに影響が出ると思いますが、よろしくをお願いします。新しい人工芝がどうなるか、楽しみにしています。

結びになります。コロナも含め、新しい年もまだまだ色々な課題がありますが、一つ一つ、力をあわせて取り組んでいけたらと思います。素晴らしい2022年にしましょう。